

これぞ ^{きょうさい} 暁斎 世界が認めたその画力

Bunkamura ザ・ミュージアム 2017.02.23～04.16



「河鍋暁斎」(1831～1889)は、時代が大きく動いた幕末から明治時代に活躍した浮世絵師・日本画家で、号は「ぎょうさい」とは読まず「きょうさい」と読むとされている。

彼は、幼児期に浮世絵師「歌川国芳」に入門した後に「狩野派」に学び、その後は流派に捉われず様々な画法を修得した“天才絵師”で、仏画、漢画、洋画から戯画まで幅広い画題を題材として**独特のユーモアをとり入れながら、強烈な個性を押し出す画風を確立した作品**を描いている。

本展は、世界屈指の暁斎コレクターのイスラエル「ゴールドマン氏」所蔵の作品によって多岐にわたる「暁斎作品」の全体像を展示する企画として開催されている。

《地獄大夫と一休》(1871～89年) (ポスターの写真)

「地獄大夫」は室町時代の遊女で、身を落としたのは前世の報いと自ら“地獄”を名乗ったが、「一休禅師」によって悟りの道に導かれたという。この両者をモチーフに描かれた奇妙な場面は、三味線を弾く骸骨の上に「一休」、「大夫」の着物は七福神の絵柄と地獄変相の図が精密な筆で描かれており、世界が認めた画力として注目されている。

めいきょうやまとだまししんぼん 《名鏡 倭魂新板》(1864年) 大判絵巻三枚続き



蛙の合戦に見立てて幕府の長州征伐を描いた明治初期の作品である。

刀匠として有名な「栗原信秀」が鍛上げた「名鏡」が洋服を着たあらゆる「悪鬼殺」を退散させるなんと

も格好の良いモチーフの絵画は、急速に西洋化する当時を風刺した作品であり、同時に新時代に突入して妖怪というモノもまた駆逐されていくという意味も含まれている。

本展では、変幻自在な「暁斎ワールド」を十二分に堪能できるものである。